

子どもたちがつくる世界環境ポスター展

WORK SHOP REPORT

2009.2.7 - 8 - 11

WORK SHOP REPORT

子どもたちがつくる世界環境ポスター展

『国連子供環境ポスター原画コンテスト』は、地球環境平和財団（東京）と国連環境計画（ナイロビ）などが主体となって、国連の地域本部の協力を得て、日本だけでなく世界中の子どもを対象に行っている事業です。

年に一度、環境問題に関わるテーマを掲げ募集を行い、審査の上、優秀作は国連のカレンダー、絵葉書などに採用されるほか、世界各地で国連が行う環境に関わる催し物の折に展示されています。コンテストの全応募作は 20 万点（100 カ国）を超え、その全てが国立民族学博物館に寄贈されてきました。地域・民族ごとに子どもたちの環境・自然に関する考え方が反映されている貴重な資料ですが、次年度より国立民族学博物館から同じ人間文化研究機構の総合地球環境学研究所に移管されることになっています。

今回のワークショップは、人間文化研究機構の関連する研究者と教育の現場の先生方が協働して、この機会にあらためて貴重な資料を活用しようと企画されました。環境問題を、世界の子どもたちの視点に着目しながら、地域ごとに異なる文化の問題としてとりあげることが目的です。その結果、子どもたちの描いた絵を、子どもたちの手で展示するという、世界でもまれな展覧会をつくり上げることができました。大人とは違う視点での、きわめてユニークな展覧会となったと自負しています。また教育関係者からは、このワークショップが、各地域の文化の違いや地球環境問題を考える格好の契機になる、と高い評価を受けました。

今後も継続されるこの活動を通して、子どもたちが文化の問題としての環境問題の地域理解を深めることを期待しています。

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所

阿部 健一

子どもたちがつくる 世界環境ポスター展

2009年2月7日(土)・8日(日) 非公開

Workshop 10:00~15:30

2009年2月11日(水・休日) 公開

Exhibition 10:00~15:30

場所：立命館小学校

メディアセンター(図書室)前廊下(B1F)

世界中の子どもたちが環境問題をテーマに描いた『国連子供環境ポスター原画コンテスト』の応募作品を使い、立命館小学校の5年生20名が学芸員となり自分たちの手で展覧会づくりが行われた。今回のワークショップは、自分の中にある既存の知識や情報からスタートするのではなく、国も名前もタイトルもない絵から、メッセージを慮る。読み取ったメッセージを基点に、自分たちのメッセージを再構成していく。いわば、編集作業としての展示活動を行った。



Index

2/7	心がまえる	05
	活動の流れを知る	
	学芸員の基本姿勢を知る	
	自分たちの使命を知る	
	小さな学芸員の誕生	
2/7	絵をじっくり見てメッセージをよむ1	04
	1枚を選ぶ	
	1枚目のワークシートに記入する	
2/7	絵をじっくりみてメッセージをよむ2	07
	関連させてもう1枚選ぶ	
	2枚目もワークシートに記入する	
2/7	グループのメッセージをつくる1	08
	同じメッセージのグループに分かれる	
	グループごとに分かれて話し合う	
2/7	グループのメッセージをつくる2	09
	試行錯誤してみる	
	キャプション、説明パネルをつくる	
	グループのテーマと展示構成	

2/8	活動をふりかえる	11
	自分たちの活動を俯瞰する	
	展示作業	11
	台紙に絵を貼る	
	キャプションを仕上げる	
	展示パネルに絵を貼る	
	展覧会をしつらえる	12
	展覧会場の仕上げ	
2/11	展覧会	13
	お客さんを迎える	
	ことばの樹	
	プレゼンテーション	14
	自分たちの声を届ける	

ワークショップの学びのデザイン	15
ワークショップを終えて	17
子どもたちがつくる世界環境ポスター展チラシ	18

心がまえる

2日間の流れをつかみ
「学芸員」として活動することを自覚する時間



子どもたちへ活動の概要を話す佐藤

活動の流れを知る

2日間を通しての活動概要の話。

●活動の流れ

- 1) 絵をじっくりみる、メッセージを読み取る
- 2) メッセージをまとめる
- 3) キャプション1
- 4) キャプション2
- 5) 展示作業1 (台紙に絵を貼る)
- 6) 展示作業2 (展示パネルに絵を貼る)

学芸員の基本姿勢を知る

絵は、貴重なものであり、緊張感をもって接するという学芸員としての基本的な姿勢について説明を行った。
作品取り扱い上での注意点は「作品を素手ではさわらないこと」「絵を見る時は小さい声で話すこと(唾がとばないように)」「ディカッションする時は作品カードを使って行うこと」など。



カードには活動のスケジュールが記入されている

自分たちの使命を知る

「みんなの展示してもらおう絵は、どんなところに住んでいる、どんな人が、どんな思いで描いたのだろうか。そんなことを、よく考えて、みんなの展示のメッセージを考えてほしい」と世界中から集められたさまざまな思いの詰まった貴重な絵を使って、自分たちなりに、もう一度メッセージを伝えるという使命を子どもたちに与えた。



子どもたちが担う使命について話す阿部

小さな学芸員の誕生

学芸員という肩書きの入った名札に自分のニックネームを記入した。学芸員としての意識づくりの第一歩となった。



名札に記入する子どもたち



絵をじっくり見て
メッセージをよむ

描き手の伝えたいことを絵からよみとる時間



1枚を選ぶ

机の上に並べられた、タイトルも説明もない絵を鑑賞した。じっくり静かに絵と向き合って、その中から気になる絵をひとり1枚選び出した。



すごく真剣に
今までより詳しく
見られたように思う

展覧会でたくさん
絵をみるより
細かいところまで
見られた

集中して見ることで
この絵では、どんなことが
伝えたいのかが分かった



1枚目のワークシートに記入する

「この絵の中では何が起っている?」「この絵のどこを見てそう思ったの?」「この絵をかいた人はなにを伝えたいのだろうか?」ワークシートに書かれた質問にそって、ポスターからメッセージを引き出していく。



絵をじっくり見て メッセージをよむ

2

絵の中のメッセージを強く意識する時間



関連させてもう1枚選ぶ

最初に選んだ絵と同じメッセージを持つ絵を探す。1枚目の作品メッセージを強く意識する結果、絵からメッセージをよみとり、絵と絵につながりを見いだした。



同じメッセージをもつ絵を探す子どもたち

絵から伝わる思いを感じることもつがしかった。いい絵がありすぎて、どれを選ばいいかわからなくなるくらい悩んだ。

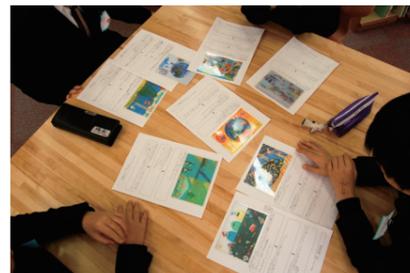
同じメッセージの絵を探すのがつがしかった。

他人が選んだ絵に自分の選んだ絵と同じメッセージがあった。

2枚目の方が読み取るのが難しかった。

2枚目のワークシートに記入する

2枚の絵についてもワークシートを記入した。1枚目のワークシートと見比べ、共通点、関連性を見つけ出し、伝えたいメッセージを整理した。



グループの メッセージをつくる

1

メッセージを編集する時間



自分がよみとったメッセージを互いに説明し合う

同じメッセージのグループに分かれる

2枚のワークシートを基に、自分が考えた絵のよみときを発表し、メッセージの似ている同士でグループになる。2枚のワークシートを持って、自分の考えた絵のメッセージを互いに話す中でグループが形成されていった。最終的に20名で6グループ（6テーマ）ができた。



グループに分かれて話し合う

グループごとに分かれ、自分たちの伝えたいメッセージを再度話し合い、展示のテーマ設定を行った。

絶対につながらないと思っていたのに、つながったことがうれしかった。

ストーリーをつくるのが面白かった。

みんなの意見を一つにまとめるのがたいへんだった。



それぞれが記入したワークシートをツールにして話し合う

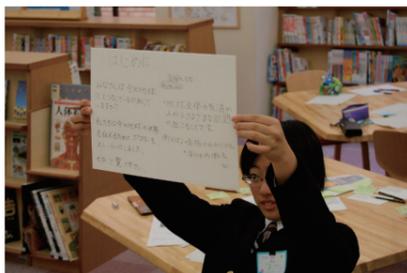
グループのメッセージをつくる

2 展示の構成を考える時間



伝えてみる→修正する→伝えてみる→修正する

グループでまとめたメッセージをスタッフの人たちに伝えてみることで、展示の構成や伝え方を吟味した。
 「海面上昇って言葉は幼稚園の子どもにも伝わるかな?」「物語にすると、とても分かりやすくして、訴えるものがあるね」など、実際に展示を見にくる人たちをイメージした意見が出された。
 自分たちが決めたメッセージを今度は「どう伝えるか」「どうすれば伝わるか」に焦点があてられた。



😊 同じメッセージでもどう伝えるかはいろいろあるということがわかった。

😞 自分たちの意見をしっかり言うべきか、見た人に考えてもらうべきか、グループで意見が分かれた。

😊 メッセージを文章にまとめるのが楽しかった。

キャプション、説明パネルをつくる

ワークシート上で考えた内容を、キャプションカード、説明シートに書き入れ、展示の説明部分を完成させた。



グループのテーマと展示構成

グループごとにテーマと展示構成が分かるように机に並べ、1日目の活動は終了した。

二つの世界



温暖化のゆくえ



地球の姿 ～消えていく森 変わる地球～



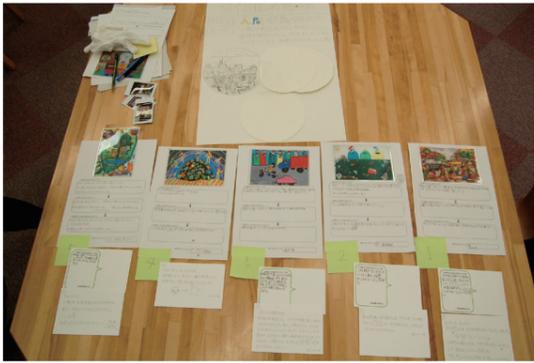
動物や植物たちの今と未来



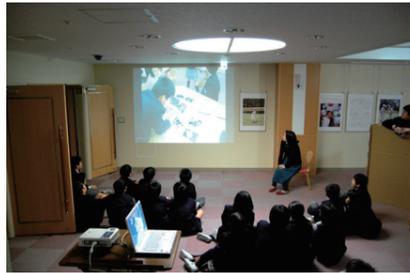
ブクブク ギャーギャー アッチッチ



人間が気づくまで



活動をふりかえる



リフレクションムービーに見入る子どもたち

自分たちの活動を俯瞰する

前日の作業をリフレクションムービーでふり返った。リフレクションムービーの鑑賞は前日の作業を思い出すだけでなく、自分たちの活動を客観的に俯瞰し、各自が自分の活動を意味づけする時間となった。

展示作業



台紙に絵を貼る

実物のポスターを台紙に貼っていく作業の前に、絵の取り扱いと展示方法の指導が行われた。子どもたち全員に白手袋を配布し、絵を取り扱う際の緊張感を演出した。



緊張した面持ちで絵を扱う子どもたち

キャプションを仕上げる

前日下書きしていた説明シートを清書し、台紙を貼りつけ仕上げた。1枚1枚の絵のよみとりメッセージが書かれたキャプションには、よみとった子どもの写真が貼られた。



展示パネルに絵を貼る

見る人たちの視線を考えながら、展示パネルに貼る位置を決め、グループで協力しながら、絵の貼つけ作業を行った。



展示ボードへ丁寧に貼つけ作業を行う子どもたち

一番見てほしいのは絵で、その次がレイアウト。そう考えて展示してみた。

見る人の目にとまるようにとか、見る人の視線にあわせるとか、お客さんの身になって考えることが大事だとわかった。

見る人に私たちの伝えたいことが一番分かる展示の仕方がよいと思う。

展覧会をしつらえる



受付の設置

展覧会の仕上げ

展覧会の仕上げ作業として、お客さんを迎える準備を行った。

1) 展覧会を見に来た人が感想を書き、壁に貼っていくための「ことばの樹」の設営、2) 案内、注意事項などのチラシやサインの作成、3) 来た人たちを迎える受付の設営の3チームに分かれ、展覧会をしつらえを行った。



ことばの樹の設営



サインの作成



ことばの樹の葉っぱの準備

展覧会



展覧会にお客さんがやってきた

会場には、子どもたちの家族をはじめ、お友達やプレス関係など総勢 200 名近くの人たちが訪れた。
従来型の博物館の展覧会とは異なり、来た人たちはポスターの絵を鑑賞すると同時に、子どもたちが考えた展覧会のメッセージと活動そのものに対して関心が向けられた。



ことばの樹

受付で、「ことばの樹」に貼付ける紙を配布。
展覧会に来た人たちも、メッセージとして、展覧会づくりの一部を担う。



来た人たちの思いが書かれた、葉っぱや実が時間を追うごとに増えていくことばの樹



プレゼンテーション



自分たちの声を届ける

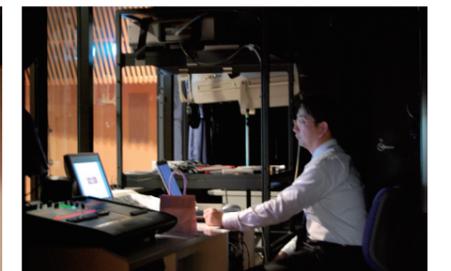
子どもたちが主体となり、プレゼンテーションが行われた。スライド上の絵を追って、ひとり一人が自分の言葉で絵のメッセージをお客さんに伝えた。



ワークショップの進行役を努めた佐藤より挨拶



展覧会開催の主旨について話す阿部



プレゼンテーションの主役は子どもたち。全てを子どもたちに任せ、PA 室から見守る荒木先生

ワークショップの 学びのデザイン

佐藤優香 (国立歴史民俗博物館 助教)

ワークショップのコンセプト

このワークショップは、子どもたちが学芸員となって展覧会をつくる活動で構成されている。ミュージアムの展示づくりでは、資料や作品などのモノから情報を引き出し、その情報を展示担当者なりの視点で再構成し、他者に伝える場として表現しなくてはならない。このような表現する立場で子どもたちが展示に関わることによって、展示テーマへの理解や考えを深めると同時に、今後、ミュージアムで鑑賞する際、子どもたちの振る舞いの変化や学びの深化が期待される。すなわち、参加した子どもたちは、あつかう資料群(ポスター作品)とじっくり関わることによって地球の自然環境と人の暮らしを掘り下げて考え、展覧会づくりからはさまざまなメディアを駆使することによるリテラシーを磨くことになる。これが本ワークショップにおける学びの意義であり、ワークショップデザインの基礎になっている。

活動のデザイン

このワークショップの活動は、1) 絵からメッセージを読み取る、2) グループごとに自分たちのメッセージをつくる、3) 展示作業、4) 会場をしつらえる、という4つの内容からなっている。

1) 絵からメッセージを読み取る (pp.4-5)

テーブルにならべられたポスター原画を鑑賞し、気になるポスターをひとり1枚選ぶ。選んだポスターと同じ原画カードを使ってワークシートを仕上げる。続いて、最初に選んだポスターと同じメッセージを持っていると考えられるポスター探し出す。2枚目のポスターについても1枚目同様にワークシートに書き込み、描き手のメッセージを整理する。子どもたちは、メッセージをマッチさせてポスターを選ぶことに苦労していた。これは、描き手の思いをイメージしながら鑑賞できていたことの表れだと考えられる。この時点で、ほかの児童が最初に選んだものとグループ化してもよいとした。これらの活動により、子どもらは、ポスターにはメッセージがあること、それを読み取ることが可能であること、世界の子どもたちの表現したいことなどを知ることとなる。

2) グループごとに自分たちのメッセージをつくる (p.6)

各自が読み取ったメッセージをもとに、共通点を探しあいながら4名1組のグループをつくる。グループごとに自分たちが展覧会を通して伝えたいことを、ポスターの描き手の代弁者として、また展覧会をつくる表現者としてまとめる。グループごとに設定されたテーマを展示タイトルとしてのフレーズとその意味を説明する文章にし、キャプションも完成させる。いっぽう、ポスター1枚ごとの読み取りについても、キャプションを作成する。グループで選んだポスターを紙芝居のシー

ンのようにストーリー仕立てにし、それによって展示を構成するグループもあった。

3) 展示作業 (pp.9-10)

展示作業はポスターの原画を台紙にとめること、展示ボードにレイアウトして貼ることの2点である。原画をいためないように、三角のコーナーシールを用いて台紙にとめ、サイズの大きなものはプラスチック板で補強した。これらの扱いについては、丁寧な指導を行い、テーブルを広く使ってひとりずつ作業を進めるようにした。展示ボードは、5枚の段ボールを組み合わせた10面の屏風状になっており、ひとつのグループにひとつの屏風を割り当てた。

4) 会場をしつらえる (pp.10-11)

会場には、受付と来場者に感想を残してもらう「ことばの樹」を設置した。ことばの樹は、段ボール紙を用いて幹をつくり、それを受付前の壁に貼った。感想を書く用紙は、3色の葉っぱ形と丸い実形を用意し、受付で配布した。展示期間中に来場者が感想を書くことで、葉が茂り、実っていく。会場案内の表示や展示会場におけるお願い事などの掲示や学内へ配布するフライヤーなどは、子どもたちの提案により作成された。

リフレクションのデザイン

1日目、2日目ともに活動の様子を記録した映像をまとめ、それを鑑賞することで活動をふりかえり、各自が活動の意味づけできるように配慮した。活動のフェーズごとに付箋紙へのコメントの書き込みをしたり、質問紙によるふりかえりの時間も設けた。

道具のデザイン

環境ポスター

このワークショップを魅力的な学びの機会として成立させている最大のツールは、展示対象である環境ポスターである。展覧会づくりに際して、展示物から情報を読み取る作業は簡単ではない。学芸員や研究者がモノから情報を読み取ることができるのは、そのこと自体に熟達しているからである。絵画作品と比べ、ポスターというメッセージ性を持ったものであることが、子どもの活動に適し、ワークショップをより意義深いものになっている。

原画カード

原画ポスターを扱う、展覧会をつくるというワークショップの特性と、子どもの思考や活動を支援するための道具を用意した。ポスターをじっくり見るが必要であっても、直接何度も見ることは原画の劣化につながる。そこで、ワークショップでは、ポスターの画像をデータ化し、はがきサイズにプリントしたカードを用意した。内容確認や、展示構成を考えたときの道具として用いた。カードは、すべてラミネート加工し、活動の過程で仕上げていく資料カードに添付できるようにした。



白手袋

ポスターはすべて原画であるため、その扱いには慎重になる必要がある。本ワークショップでは、参加者全員に白手袋を用意した。ミュージアムでは、資料や作品に触れるとき、必ずしも手袋を着用するわけではなく、モノの性質によって判断される。本ワークショップでは、手袋を着用することによって、緊張感を持ってポスターを扱うという自覚を促すために有効なツールになることが予想されたため採用することにした。



空間とスタッフのデザイン

展覧会は、コミュニティスペースにもなっているメディアセンター前の廊下で開催することとし、ワークショップは、展示スペースに面したメディアセンターで行った。メディアセンターの奥、右側に配置された小さなテーブル席を考えたり話し合ったりするアクティブな活動の場とし、書棚でへだてられた左側に配置された長テーブルにはポスター原画を並べて静かに鑑賞する場とした。原画を扱う場所と考えたり話し合ったりする場所を分けたのは、活動にメリハリをつけることや、空間ごとに振る舞いを切り替える作用を期待したからである。空間内にドキュメンテーションラボを設け、スタッフは、進行、ドキュメンテーション、プレス対応の3つの役割で配置した。

資料カード (ワークシート)

ワークシートは、原画ポスターのメッセージを読み取るための思考のプロセスが問いとして用意されている。「この絵の中では何が起きているの」「この絵のどこを見てそう思ったの」「この絵をかいた人は何を伝えたいのだろう」。子どもたちがこれらの問いに答えていくことで、おのずとメッセージがみえてくる仕組みである。シートの上には、原画カードを貼るスペースもあり、ワークシートを見れば、どのポスターがどんなメッセージを持っているかがわかるようになっている。ワークシートは、自分の読み取りをグループ内で共有したり、展示構成を考えたときに並べ替えるなど、思考を発展させていく過程で用いるツールとしてデザインしている。



キャプションカード

ポスター1枚ごとにつけたキャプションには、それを選びメッセージを読み取った子どもの写真を添付できるようにした。子どもたちひとり一人によって選ばれ、解釈されたメッセージであることを鑑賞者に伝えるためである。

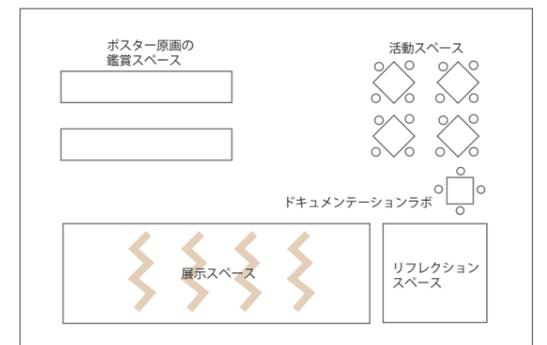
展示用ボード

5枚の段ボールを屏風状に組み合わせ、10面の展示ができるようにした展示ボードを4セット用意した。展示ボードの高さは135cmにし、ボードの向こう側にも人がいることがわかり、子どもでも鑑賞しやすい高さになるように配慮した。



台紙、コーナーシール、両面テープ

台紙には色画用紙を用意し、ポスターを引き立て会場を統一感ある雰囲気にしつらえることができるような色味を選んだ。グループごとに色分けできるように数種類の色を用意して、ポスターのサイズにあわせてカットした。展示ボードには両面テープでとめた。



ワークショップ空間配置イメージ

ワークショップを終えて

テレビや本やインターネットなどから環境問題についての知識にさらされている子どもたち。今回のように自らが学芸員というメッセージを編集し、発信する立場にたつという連のワークショップに参加したことで、子どもたちはどのようなことを学び、どのように感じたのだろうか。

以下は子どもたちがふりかえりシートに記入した内容である。



ふりかえりシートより抜粋

- テレビなどから知るより、自分でやる方が本当に大切なことを知れる気がした。
- 展示会は本物の絵を借りてやるから緊張感もあるし、環境も身近によくわかるという良さがある。
- 本やテレビはそれをつくった人にしかどのように感じている分らないけど、ポスターを見ることで人々はどのように感じているのかが分かる。
- 展示会をつくることで、自分でよく考えられる。
- 自分で見て書くことによって、より身体に環境という物が感じられる。
- 実際にポスターを見てストーリーを作ると自分たちの頭で深く環境について考えられると思った。
- 世界の人が環境をどう思っているかが物や絵をとおして分かる。
- 実際に環境について考える方がよく分かる。
- 実際の厳しい状況を実感できる。
- 深く学べる。
- 自分の目で直接見れる、知れる。
- 本やテレビだと「ふ〜んそうなんだ」でおわることが、展示会をつくって環境について考えることは「こんなことを自分たちでやった。」と思って一生忘れられなくなると思う。
- 実際につくって体験するのと、ただ見るだけののでは、つくって体験する方が身にしみる。
- テレビや本だと「ふ〜ん、そうなんだ〜」で終わってしまうけど、展示会を自分でつくってみると「これはまずいな」と真剣になれる。
- 展示会づくりでは絵を描いた一人一人の気持ちがよみとれる。
- 相手に伝えるために、自分たちがよく考える事ができる。
- 自分たちの意見が書けて、その意見を人に見せ、多くの人に「環境」について興味を示してもらえる。
- 環境問題のことがよく分かり、自分でできるとことはやろうと思う。
- 自分の考えだけでなく、他の人の考えも知ることができる。
- 本やテレビで知るの科学のこととかが関係していて、展示会で絵をみたりして考えるのは、自分の思いとか、そんな感じ。

伝えたいメッセージは何だろう。
伝えるべきメッセージは何だろう。
どのようにして伝えればいいのか。

世界中の子どもたちが環境問題をテーマに描いた『国連子供環境ポスター原画コンテスト』の応募作品を使い、立命館小学校の5年生20名が展示会をつくります。

学芸員になってみた子どもたちは、
何を感じ、何を学ぶのだろうか。

子どもたちがつくる 世界環境ポスター展

2009年2月7日(土)・8日(日) 非公開
Workshop 10:00~15:30

2009年2月11日(水・休日) 公開
Exhibition 10:00~15:30

場所：立命館小学校 メディアセンター（図書室）前廊下（B1F）
主催：人間文化研究機構・総合地球環境学研究所・立命館小学校
協力：国立民族学博物館

人間文化研究推進事業

子どもたちがつくる世界環境ポスター展チラシ

Member

Director

阿部 健一（総合地球環境学研究所・教授）

Workshop Design

佐藤 優香（国立歴史民俗博物館・助教）

Ritsumeikan Primary School

荒木 貴之（立命館小学校・教頭）

&

児童 20 名

Secretariat

飯塚 宣子（総合地球環境学研究所）

菊地 薫（総合地球環境学研究所）

Art Direction

三宅 由莉（trois maison）

Documentation

伊達 元成（総合研究大学院大学）

五月女 賢司（国立民族学博物館・機関研究員）

大西 景子（SODA design research）

Advisor for Artifacts

管 絵里子

Advisor

秋道 智彌（総合地球環境学研究所・副所長）

吉田 憲司（国立民族学博物館・教授）

WORK SHOP REPORT

子どもたちがつくる世界環境ポスター展 WORKSHOP REPORT

発行日 2009/3/15

発行者 総合地球環境学研究所

編集・デザイン trois maison
